

通信陸上大阪大会

(7/5・6 長居ヤンマースタジアム) RESULTS

- 全国大会参加標準記録突破のための指定大会。全国大会出場を賭けて、大阪のトップアスリートたちが夢に向かって最高のパフォーマンスを発揮する。参加標準記録を突破して、ガッツポーズを繰り返す者、顔を覆って涙を流す者、さまざまな感動的な光景が随所に見られる大会となりました。電光の大型映像に「おめでとう！全国大会参加標準記録突破!!」の文字が映し出され、アナウンサーも興奮気味に「～選手、全国大会参加標準記録を突破しました」と伝え、観客席から拍手と歓声が巻き起こる。2007年世界陸上が開催された日本有数の大スタジアムだけに、フィールドに立っているとその拍手と歓声が上から容赦なく降ってくるのです。お腹に響くくらいの迫力に、素晴らしい大会であることを改めて感じました。各校の集団応援や、朝の7時前から大声を出して補強を繰り返す各校の選手たちの躍動感…etc. まさしく青春の1ページを飾るにふさわしい名場面がたくさんありました。この2日間で全国大会出場を決めた選手は52人、56種目にもものぼりました。次回の大阪中学選手権でさらにトライして100人突破を目指す、大阪中学陸上あっぱれです！
- 大会2日目。1年男子100m予選2組。4レーンに小森が登場する。スタートからきれいに飛び出して独走となる。「4レーンは東雲の小森くん！」とアナウンサーが紹介したと思ったらそのまま小森がフィニッシュ。12秒34。彼の自己ベスト。さらには向かい風2.1mの悪条件の中での記録である。全体のトップ通過ではなかったが準決勝に順調に進み、準決勝1組でも独走で1着。準決勝2組のレースを見て、枚方桜丘の選手の走りが目をひいた。さらには河南の選手の走りも素晴らしい。決勝で3位以内に入れば、近畿大会出場が決まる。この3人が3位以内になるだろうということは十分予測できた。3人の力は拮抗している。その中で「何とか小森を勝たせたい」と強く思った。もっと正確に表現すれば、「優勝をしっかりと狙わせて、優勝させたい」ということだ。たまたま運良く勝っても意味がない。この大一番の大舞台で優勝するために技術的なこと、メンタル的なことをしっかり理解させた上で戦い切ることが大切である。このことがクリアできれば、たとえ負けたとしてもこの体験は大きな財産となるからだ。決勝レースの前にもう一度、スタート地点に足を運んで小森にいくつかのアドバイスをした。2人で決勝レースをシミュレーションしたのである。スタートの加速局面のこと、後半3人で競り合ったときの接地のタイミングについて…etc. 一番怖いのがスタートが出遅れて、



そこであわててしまい、力が余分に入って自分の走りができなくなってしまうこと。「良いスタートは反応時間が短いということではなく、効率の良い加速ができることなんだ。だから、万が一、スタートの反応時間が悪くても、絶対に気にしないで効率の良い加速をすることを大切にしよう！」と言うと「はい！」と彼は元気よく返事した。いつも誠実で真面目に練習に取り組む彼の人の人柄そのままの返事であった。やがて音楽が鳴って、レーン紹介が始まる。大阪の中学1年生で誰が一番速いのかを決めるレースがいよいよ始まるのだ。5レーンに小森。スターターの声に競技場が静まりかえる。ゴール地点で見守る自分も固唾を呑んだ。ピストルが2回なった。隣の6レーンの選手の体が動いて「警告」が与えられた。仕切り直し。スターターのピストルが鳴って、8人のまだあどけないファイナリストがきれいにスタートを切る。予想どおり4レーンの河南の選手、7レーンの桜丘の選手と接戦になる。70m過ぎたくらいか。小森は自分の走りを崩さない。走りの軸が崩れていないので、ピッチのリズムが頑固なまでに一定である。小森がそのまま2人を引き離してフィニッシュ。そして軽くガッツポーズ。会心のレースであった。12秒13。追い風0.4m。一番大事なレースで自己記録を更新したのだから立派である。2着が河南の選手で12秒25、3着が桜丘の選手で12秒28。この3人が近畿大会1年100mの大阪府代表選手となった。

フィニッシュしてから、役員に表彰セレモニーの控え室に向かう小森とすれ違いざまに「おめでとう」と、声をかけて握手をした。笑顔の小森。今回の優勝で、彼がさらに大きな夢に挑戦する始まりとなったはずだ。近畿大会での優勝、さらにはジュニアオリンピック、夏の全国大会…etc。大きな夢舞台での活躍を目指して、強い精神力で誰よりもきびしく日々の練習に精進していくと、心に強く刻みこむ日となったことに他ならない。

- 四種競技に出場した2人の選手が健闘した。男子の神原は出場した選手の中でただひとりの2年生。その選手が7位入賞を果たし、表彰台に上がったのだ。圧巻は最終種目の400m。疲れた体をものともせず魂の走りを見せた。前半から積極的に飛ばし、第2曲走路でもスピードを緩めない。最後のホームストレートもしっかり押し切った。56秒69の自己ベストで花を添えて、1962点で7位入賞を見事に果たしたのだ。まだ2年生だけに体もまだまだ大きくなるはずだ。基礎体力が上げれば、身体能力は必ず向上し競技力も大きく伸びていきます。来年はぜひ2500点突破を目指したい。全国大会参加標準記録である。来年の全中は北海道。北の大地で大きな夢の花を咲かせたい。今からワクワクするね。こうなると毎日の練習が今まで以上に楽しく集中できるようになるものです。



「通信大会で8位入賞して表彰台にのぼる！」と強い決意を持って今大会に臨んだのが3年生女子の加藤。彼女の1年生当時の走りからすれば、大阪大会の入賞を狙う選手になったのだから陸上競技は面白い。ハードルで16秒台中盤、走り高跳びで1m50の記録を目指していた。事実、走り高跳びではグラウンドで1m55を跳んでいるのだから、現実的な目標設定と言えた。最初のハードルで16秒80とますますの好発進。続く走り高跳びで1m49の高さを惜しいところで3回失敗。1m46にとどまる。続く砲丸で自己新の9m41を putt した。何と3種目が終わった時点で4位につけたのである。彼女のこれまでの努力を知っているだけに、祈るような思いで最終種目の200mを見つけた。混成競技の200m最終組に入る加藤。混成競技では、3種目を終わった時点で記録上位の8名がスタートリストに組みこまれることになっているのだ。この組にはスプリントが得意な選手が集まっている。さらには全国大会に出場するような実力のある選手もいる。このことが加藤に災いした。まわりの選手の速さについていけず、あせって自分の走りがまっただけできなかったのだ。29秒83で最下位でフィニッシュ。やがて四種競技の最終順位が発表された。加藤は2181点で9位。表彰台に立った加藤を思いっきり祝福してやろうと思っていただけに、この冷酷な結果に自分も涙が出そうになった。



- 110mYHに出場した2年生の堀本が見事に戦い切った。すでに2級を突破して中体連の強化選手が確定している堀本が、今大会の予選でも15秒92と自己ベストを更新して難なく準決勝進出を決めた。大阪のセミファイナリスト16人の中で、ただひとりの2年生となったのだ。準決勝は2組で3着プラス2名が決勝進出となる。数字上では組の5着でも決勝進出の可能性もある。2組3レーンに堀本。スターターの号砲で勢い良く8人の選手が飛び出した。中盤あたりでも混戦。後半、力のある選手が抜け出したが3～7番手あたりは混戦のまま。なだれこむように選手がフィニッシュした。堀本の順位を電光掲示板のライブリザルトで確認した。6着15秒84。風は向かい風0.1m。1組の風は追い風0.9m。結局、条件の悪い2組からプラス2名が拾われることとなった。16人の中で9番目。わずかに100分の7秒差。堀本の準決勝敗退が決定した。それでも、この競り合いの



難しいレースの中で自己ベストをさらに更新。素晴らしいレースをやり切ったことが大きな収穫となった。9月のジュニアオリンピック挑戦記録会までに15秒30のジュニアオリンピック参加標準記録突破が、彼の新たなる目標となった。ジュニアオリンピックに出場し入賞。さらに来年の夏の北海道全中出場、そして上位入賞。夢はどこまでも大きく広がっていく。楽しい選手である。

- 大会2日目。午前中までにすべての種目の予選が終わり、午後からは準決勝、決勝が続く競技ダイヤとなる。今まで当たり前のように決勝に残っていたリレーも平凡な記録に終わり決勝進出の道を絶たれていた。こうなると注目は長距離の決勝種目となる。前日の予選を通過した1年男子1500m決勝に出場する川本と荒木貫志、共通女子1500m決勝に出場する木下の入賞を期待する時間帯となった。

15時30分。1年男子1500m決勝。前日の予選で232名の選手が10組に分かれて予選レースをおこない、タイム上位15名が決勝レースにのぞむことになる。この決勝レースに東雲の選手が2名。この光景は昨年の通信大会も同じで、このときは当時1年生であった島口と奥村が2位、3位になだれこみ2人とも近畿大会出場を果たすという快挙を成し遂げていた。前日の予選レースで川本は4分53秒88、荒木は4分53秒98と、ともに自己ベストを出す期待どおりの走りであった。近畿大会出場には4分30秒台の記録が必要である。まずは2日続けての自己ベスト更新を目指すことが順当な目標となった。決勝レースでは2人とも小さな体を目いっぱい使って闘志あふれる走りを見せた。結果は残念ながら上位に食いこむことなく終わってしまったが、2人の豊かな将来性を感じた。練習のときから、あきらめない強い心を持っている。ペースが上がっても歯を食いしばってついていく。このがんばりを逆に上級生が学んで欲しいと思えるくらいです。体が大きくなれば、必ず大成する選手と今からとても楽しみにしているのだ。

続いておこなわれたのが共通女子1500m決勝。木下は前日の予選で1500m4分51秒92のますますの記録で走っている。この予選では全国大会参加標準記録4分38秒00を突破した選手が5人もいるなど、史上稀に見るハイレベルなレースとなっていた。この決勝レースではまず2級の4分46秒00突破を果たしたい。最低でも8位入賞を！



という強い決意でのぞんでいたはずだ。その思惑どおりに前半から先頭集団に食らいつく木下。800mを過ぎて、ラスト1週の鐘が鳴る1100m地点までの300m。この区間で全国大会に行く選手はさらにスピードが上がるイメージがある。木下はここからややペースダウンしてしまう。ラスト1週の鐘が鳴ってスパート。木下も疲れた体にムチ打って、必死で前を追いかけようとするが、他の選手も同じ。この決勝レースで走る選手は、みな力を持っている。少しずつ順位を落とし、4分52秒93の記録で結局10位に終わる。ゴールして大粒の涙を流す木下。彼女の練習でのがんばりはよく分かっている。全国大会に行くには、さらにながめるその先を見据えて日々鍛錬していくしかない。およそ3週間後に控えた大阪中学選手権では修正して、まずは2級突破を是が非でも果たしたい。

- 女子走り幅跳びに出場した長野が予選ラウンドの1回目の跳躍で4m81の自己ベストを出して予選通過記録(4m80)を突破して、簡単に決勝進出を決めた。この春から踏み切ったあと、体をねじって着地する悪い癖を修正するために、7歩踏み切り板ジャンプを繰り返し練習させていた。踏み切り足を巻く癖も直して、空中姿勢でも腰で地面の反発をもらえるように何度も練習させていたのだ。その成果がここへ来てやっと実ったのか、この数試合でも自己記録を着実に更新していた矢先であった。決勝では会心の跳躍がファウルになってしまい、残念ながら4m68でベスト8に進めなかった。



今回の結果で必ず5mを跳んでやると強く決意することになったはずだ。100mでも13秒台で走る走力を生かして、ぜひ5m越えを果たして欲しい。男子走り幅跳びでは、逆に三浦拓人が予選通過記録(4m85)にわずかに届かず予選敗退となってしまったが、彼もまた6m越えをぜひ実現してもらいたいと願っている。2年生の塩見は2級(6m10)の記録を視野に入れるためにも、三浦先輩よりも先に6m越えするイメージで日々の練習に取り組んでいきたい。



- 男子3000mと男子1500mには6人の選手がエントリーされている東雲男子中長パート。先にも紹介したとおり、1年男子1500m決勝には川本と荒木貫志の2人が決勝進出したものの、共通の長距離種目では惨敗となった。2年男子の白石、松本らが自己新を出して、伸び盛りであることを証明してみせたのが唯一の救いとなっただけ。しっかり溜めこんで練習して、調整期間になってから体調を崩す者やケガをする者が3人もいては戦えないのもある意味当然である。今の状態では駅伝ではもっと戦えない。目指すものをもっと心の中に刻みこんで、いい意味で緊張感のある日々を過ごす必要がある。

いつも言っていることだが、日々の生活の中で（もちろん練習も含めて）凡事徹底することである。

- 今大会は残念ながら東雲ブルーの旋風を巻き起こすことはできなかった。惨敗である。大阪中学選手権までおよそ3週間ある。少しでもチームを立て直して、近畿大会出場をあと最低でも2種目は確保したい。全国大会出場はきびしい現状には変わりはないが、望みがあるかぎり決してあきらめないで、大阪の頂上決戦の日を迎えたい。最後になったが、補助員の仕事お疲れ様でした。集団応援もよくがんばった。チームの雰囲気は昨年よりも前向きであったと評価しています。3年女子のリーダーシップぶりに毎度のことながらいつも感謝しています。

